



なら工藝館

NARA
CRAFTS
MUSEUM

STORY BOOK

ストーリーブック



NARA CRAFTS MUSEUM

なら工藝館
NARA CRAFTS MUSEUM

STORY 1

なら工藝館で触れる、
奈良の工藝歳時記



日本の伝統工芸の原点を知る・学ぶ

平城京に都が置かれた奈良時代。

奈良時代には遣唐使けんとうしや外国からの使節しせつによって、

遠くはペルシャ・インド・中国をはじめとするアジアの国々から、

書物や薬品・服飾などの様々な文物が持ち込まれ、日本文化の発展に大きく貢献をしました。

奈良に届いた技術の数々は、新たな工夫や創造が加わり、さまざまな形に洗練され、日本各地へと伝わっていったのです。

伝わった技術はその地の素材と融合しながら独自の文化・文明として開化しました。

今を生きる私たちに守り伝えられてきた美しいものである“工芸”的原点はすべて奈良にあります。

「なら工藝館」では、1300年以上の悠久の時とともに培われてきた技術と、その進化した姿をお伝えしてまいります。

長い歴史に育てられた奈良工芸の伝統と魅力の一端に「なら工藝館」で触れてください。

なら工藝歳時記

奈良の四季と歴史を彩る工芸

1300年の歴史から生まれた工芸は、今もさまざまな奈良の四季を彩っています。

なら工藝館では「なら工藝歳時記」として奈良の四季と工芸の美を紹介していきます。

春 SPRING



奈良漆器

夏 SUMMER



奈良団扇

秋 AUTUMN



奈良筆

冬 WINTER



赤膚焼



古楽面



奈良晒



奈良墨



奈良一刀彫

春

SPRING

2月 - 4月

東大寺のお水取りが終わる頃、奈良に春がやってきます。

な ら しつ き
風格ある 奈良漆器 の什器や調度品は、

ぎょうほう
お水取りの厳しい行法にも華を添え、

れんぎょうしゅう
練行衆と呼ばれる心身を清めた僧たちを見守ってきました。

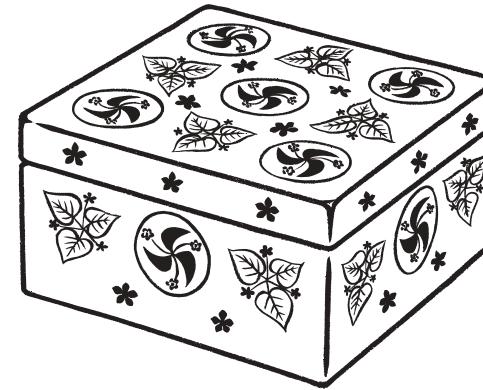
この行法が始まったのは、

だいぶつかいげん
大仏開眼と同じ752年(天平勝宝4年)

いこくじょうちょ
異国情緒豊かな伎楽が奉納されたといわれています。

今ではインテリアとしても評価の高い

こ がく めん
古樂面 の源流も伎楽面にあるといえるでしょう。



奈良漆器

奈良時代にシルクロードを経て奈良に伝わった器物には、漆で絵を描いたもの、螺鈿・金銀平脱・平文など多種多様な技法を自由に駆使した漆芸品が多くありました。奈良が日本の漆器発祥の地と呼ばれる所以です。中世には社寺に所属し、建造物の塗師を勤めるとともに漆器も造る塗師・漆屋座が登場します。現在の奈良漆器は、夜光貝など、光沢の美しい貝を貼り付けて漆を塗り重ね研ぐ「螺鈿」という技法が特徴です。器や調度品はもちろん、箸などのカトラリーやアクセサリーなど様々なものが漆器の手法でつくられています。



山本 哲 Yamamoto Satoshi

「奈良漆器は、木地に漆を塗る塗立てで終わらず、油分を含まない漆を重ね、研炭などで研ぎだして艶を出す螺鈿色塗をするのも特徴なんですよ。一般的な漆器の十倍は手間がかかっています。その分高価ですが、漆器は意外なほど丈夫。もっと気軽に使ってほしいですね」と山本さん。特にアイスクリームや日本酒は格別の味わいになるそうです。



古楽面

古楽面とは、伎楽・舞楽に使われてきた面を精巧に模したもので、飛鳥時代に仏教とともに日本に伝わった。伎楽・舞楽では、当初からさまざまな楽面が使われ、正倉院宝物にも奈良時代の楽面があります。古くはすっぽりと頭にかぶって使うものが多く、次第に顔前面だけにつけるものが登場し、能・狂言の面にも影響を与えました。第二次世界大戦後は、これらの面全般が、装飾用に模造されるようになり、工芸品として全国の百貨店などでも扱われるようになりました。現在も社寺などでさかんに雅楽が演じられる奈良では、能・狂言に使う木彫の面も含め、実際に使うことができる楽面を制作する作家も活躍しています。



中坊竜童 Nakabo Ryudou

「可能な限り、本物に近い面をつくりたい。博物館などで本物を見るのはもちろん、細かい点は書物などで確認します」と話す中坊さんは、この道60年。工房には、奈良時代の大仏開眼に使われた伎楽面、いまも社寺で奉納されることが多い蘭陵王の面などがずらりと並んでいました。能や狂言で実際につける面も手掛けているそうです。



夏

SUMMER

5月 - 7月

奈良盆地の夏は蒸し暑い日が続きます。

人々は涼を招くために様々な技術を生み出してきました。

な ら う ち わ
和紙に施されたすかし彫り模様が美しい **奈良団扇**

織細なつくりに職人の技を感じます。

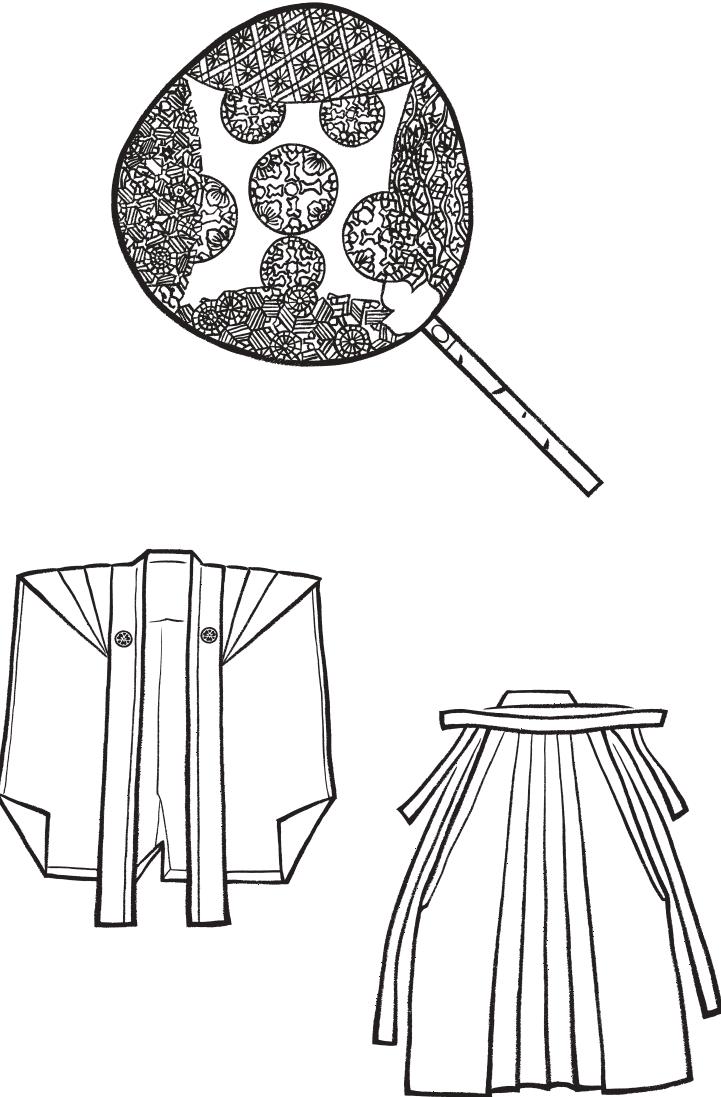
ゆかた
柔らかな風は心地よく、浴衣姿にも華を添えます。

ならまちを歩けば、風情ある町家の玄関には

しごく な ら さらし のれん
至極の麻で紡がれた **奈良晒** の暖簾や、

軒に吊られた風鈴が涼しげに揺れ、

なつかしい日本の風景に出会えます。



奈良団扇

奈良団扇は美しく染めた和紙に繊細に施されたすかし彫りが特色です。絵柄には天平文様や鹿・藤の花・万葉歌など奈良らしいものが多く取り上げられています。奈良時代、春日大社の神官の手内職として作られた渋団扇が起源とされます。その後、次第に洗練されていき、江戸時代初めには現在のような形の団扇となったと言われています。見た目が美しいのはもちろんのこと、実用性も高い理由は和紙を張る穂が60～90本もあるためです。軽く扇ぐだけでよくしなり、よい風が起ります。1940年代までは奈良市内に数件の団扇店がありました。



池田匡志 Ikeda Tadashi

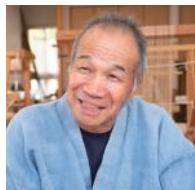
今では一軒しかない奈良団扇専門店の若き六代目当主の池田さんは、冬場に紙染めと骨づくり、春から夏にかけて彫りと仕上げを家族の助けも借りながらこなすそうです。

伝統的な色柄の団扇をつくるだけでなく、「毎年秋にはオリジナル作品に挑戦します。伝統を守るだけなく、奈良団扇の新しい魅力を未来へ受け継いでいけたら」と真摯な表情が印象的でした。



奈良晒

奈良晒とは麻織物のことです。大麻糸を約1ヶ月かけて丁寧に織り上げた麻布を清流に晒し、真白く仕上げます。僧侶や神官の衣服として古くから使われていました。安土桃山時代に清須美源四郎という人が、従来の晒法の改良に成功し、にわかに盛んになったといわれています。製法が改良されて以降、武士の袴や夏の単衣ものとして販路が広がりました。江戸幕府にも認められ、徳川家康は御用品として、製造販売を掌握統制する制度をつくったほどでした。現在は、茶道に使う茶巾、数奇屋袋のほか、コースター、巾着袋など日常使いできる製品も人気です。



岡井孝憲 Okai Takanori

「奈良晒は撚りをかけた麻糸を縦糸に、撚りをかけない麻糸を横糸に織り上げます」と、大和機を動かしながら、岡井さん(奈良県伝統工芸士)が教えてくれました。「この独特の織り方が、奈良晒の光沢としなやかな風合い、優れた吸水撥水性を生むんです」と言います。茶道の茶巾以外の小物や反物などは、晒さず、麻本来の生成り色を生かすことが増えています。



秋

AUTUMN

8月 - 10月

しょうそういんてん
秋の正倉院展は奈良の風物詩。

シルクロードからもたらされた1万件にも及ぶ宝物が、

正倉院で1260年以上も守り伝えられてきました。

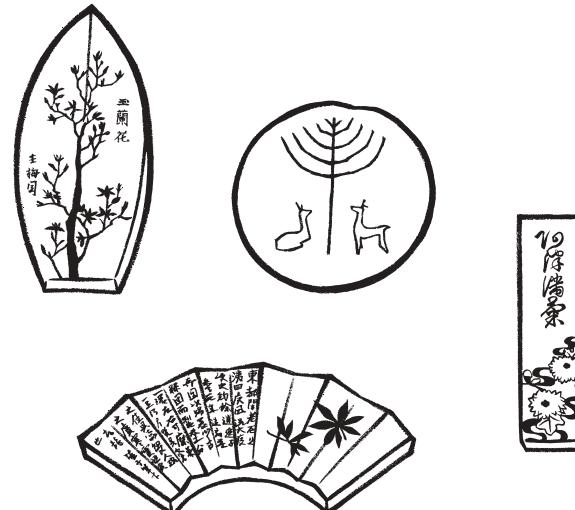
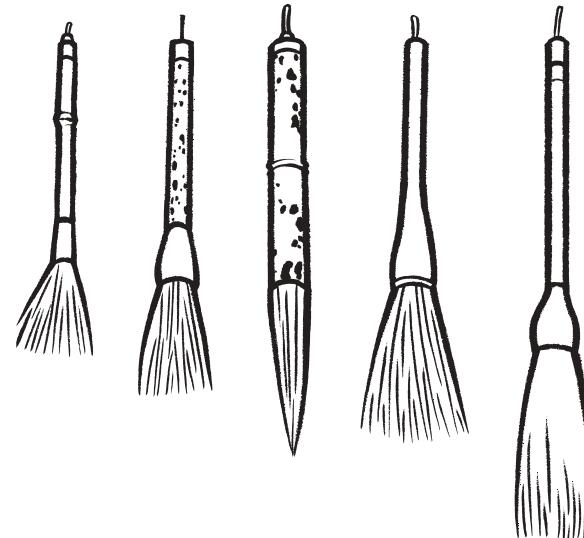
かつて大仏開眼の際に用いられた筆、写経に使われた墨が、

な ら ふ で な ら す み
奈 良 筆 や 奈 良 墨 を

どじょう
生み出す土壤を育んだのでしょうか。

正倉院宝物の色使いや文様は、今も奈良で創り出される工芸に

インスピレーションを与え続けています。



奈良筆

奈良筆のルーツは、空海が最新の技術を唐から持ち帰り伝えた紙巻筆にあるとされます。大和国今井の坂名井清川に作らせ、嵯峨天皇と皇太子に献上したと言われています。この清川の子孫が今井で毛筆製造に従事しましたが、次第にその中心は墨の産地で寺院などの需要の多い奈良へ移行し、発達しました。その後、明治時代初めからは、強弱の毛を組み合わせ、糊で固める無心筆・水筆が主につくられるようになっていきました。高級筆を中心に製造する奈良は、広島・愛知・仙台・新潟などと並ぶ筆の主産地となっています。なお、奈良筆は経済産業大臣認定の伝統的工芸品指定を受けています。



松谷文夫 Matsutani Fumio

「奈良筆の工程はすべて手作業です」と筆づくり40余年という松谷さん(伝統工芸士)は、誇らしそうな表情で語ります。「奈良筆では、イタチ、ヤギ、鹿、狸の毛を合わせることが多いです」と話しながら、役割によって違う長さに切り揃えた毛の束を薄く広げては混ぜ合わせます。この「練り混ぜ」と呼ばれる工程が、筆の見た目だけでなく書き味も左右します。



奈良墨

墨には松脂を燃やして造る「松煙墨」と、菜種や胡麻・桐の油を燃やしてつくる「油煙墨」とがあります。南都油煙墨と呼ばれたいわゆる奈良墨は、遣唐使として唐へ行った空海が、筆とともにその製法を持ち帰り、興福寺二諦坊でつくったのが始まりとされています。一方の松煙墨の方は、油煙墨より遅い平安時代の終わり頃に紀州や近江でつくられるようになりましたが鎌倉時代に途絶えました。安土桃山時代以降、奈良の墨の評判が全国的に高くなっています。製墨所が相次いで誕生しました。現在も奈良墨は、全国シェア90%を誇り、経済産業大臣認定の伝統的工芸品指定を受けています。



松田英治 [左] / 西岡淳仁 [右] Matsuda Eiji / Nishioka Atsuhito

奈良墨は、原料の膠が暑さで腐りやすいため、毎年10月～4月に製造します。書はもちろん水墨画にも使われ、昔から「黒に七色あり」と言われてきました。型入れ職人である西岡さんと松田さんは、「奈良墨はその美しさが特徴です」と声を揃えます。煤、膠液、香料を混ぜ、餅のようになった墨玉を、熟練の技で手もみ、足ねりすることで、硯で磨った面にも艶が宿る奈良墨が出来上がります。



冬

WINTER

11月 - 1月

空気が凜とはりつめる奈良の冬。

ほのかな赤みを帯びた土色の 赤膚焼 には、

愛らしい奈良絵が多く描かれ、手に伝わる器の温もりに癒されます。

奈良の1年を締めくくる春日若宮おん祭を彩るのも、

奈良の地で培われてきた様々な工芸品の粋です。

とりわけ大宿所祭で供えられる盃台を飾る

奈良一刀彫 は、

面で構成される奈良人形ならではの表情が、

見る者の目を引きます。



赤膚焼

良質な陶土が産出する西の京丘陵一帯は、古代から土器・火鉢などの制作が盛んに行われる窯業地でした。茶の湯がおこると土風炉がつくられるようになり、安土桃山時代の天正・慶長年間には、大和郡山城主の豊臣秀長が尾張常滑から陶工を招き、茶陶をつくらせ、江戸時代中期には、大和郡山城主・柳澤堯山が京より陶工を招き、郡山藩御用窯として赤膚焼を保護奨励します。これを機に、青木木兎、奥田木白といった名工も活躍しました。赤膚焼の伝統的な魅力である素朴な「奈良絵」を大切にする一方で、新しい色彩や形の作品も多くつくられています。



大塩 正 Oshio Tadashi

「赤膚山の土は鉄分を含んでおり、釉薬をかけて焼くと、鉄分と反応し、温かみが出ます」と話す大塩正さん。「赤膚焼中興の祖・奥田木白は『諸国焼物模物所』の看板を掲げ、多彩な作風を誇りました。この姿勢も赤膚焼の守るべき伝統です。」との言葉通り、工房にはさまざまな表情の器が並んでいました。

※『諸国焼物模物所』:日本各地のやきものに学び、それらを模した作品を造る技術を持っているという意の看板。



奈良一刀彫

奈良人形とも言われ、平安時代末期から現代まで続く春日若宮おん祭において田楽を演じる法師(笛吹役)の花笠や盆台を飾った彩色の人形に始まると伝えられています。江戸時代中頃になると、名工・岡野松寿(初代～13代)が現れて名声を高め、幕末から明治初頭には森川杜園が活躍。一刀彫は全国的に芸術作品として注目されるようになりました。大胆で力強い鑿跡と、極彩色の彩色が特徴です。神事に使われるため、最小限の鑿しか入れないことで清浄を重んじた結果、簡潔な鑿跡の奈良人形となったという説もあります。能、狂言、舞楽、鹿に材をとったものが伝統的につくられてきました。最近は雛人形、干支、兜などが人気です。



荒木義人 Araki Yoshindo

「いかなる面で構成するかを考え、鑿を当てていきます」と話す荒木さん。生き生きとした華やかさのある作品に全国からの注文は絶えません。「存在感のある一刀彫は、今の住宅事情にも合い、季節の作品を中心と/or>ても人気があります。自分自身の個性を大切にしつつ、これからも一刀彫を多方面に発信していきたいです。一刀彫は彫刻の優れた手法のひとつであり、その歴史も含め、奈良を代表する文化だと誇りをもっています」という言葉からは静かな情熱が感じられました。



引き継がれてきた奈良の工芸のバトンを、
さらに未来へとつなぐ若い精鋭作家にインタビューしました。



Profile

春日有職5代目神箸東林に師事。奈良伝統工芸後継者育成事業第1期生として3年間の研修を修了。第壱回奈良伝統工芸展で作品「黒鬼と白鬼の囲碁対局」が人気投票第1位に輝く。2016年奈良市ふるさと納税返礼品の段雛を制作。



前田 浩幸
Maeta Hiroyuki
奈良 一刀彫

みなもとよりまさ ぬえたいじ
取材時、なら工藝館に前田さんの作品「源頼政鶴退治」
が展示されていました。(現在は展示終了しております)
顔は猿で手足は虎、尾は蛇という不気味な鶴が、源頼
政に今にも襲いかかりそうな緊迫感にあふれています。
たび やづつ
頼政の足元は足袋のまま、背に矢筒も見えません。作者
の前田さんは「『平家物語』にある有名な場面ですが、
服装や武器の決まりごとをあえて破って、鶴の神出鬼没
性を表現したいと思いました。中学生ぐらいからものづ
くりに興味があり、なら工藝館を訪れ一刀彫の道に
入って16年。つくりたいものは次々と浮かんできます。現
在製作中の能人形春日龍神では、あえて人形の命である
面の一部を髪で隠し、莊厳さを強調してみたいです」
と独特な世界観を語る表情は意欲的です。

(写真左上)細かい部分は彫刻刀を使い、仕上げていく

(写真右上)荒彫り。鑿で大まかな形を木から「生み出していく」と前田さんは言う
(写真下)緊張感が伝わってくる前田さんの作品「源頼政鶴退治」

未来へのメッセージ

八尾さつき Yao Satsuki

奈良漆器

学生時代に研究していた平安時代の硯箱を「一度模造してみては」とすすめられ、初めて漆を触った時、息苦しくなるほどかぶれてしまったそうです。「その経験がとても新鮮で、本格的に漆芸をやることに決めました。変わった動機かもしれませんね」と八尾さんは笑います。茶器の棗や食籠のほか、帯留め・ネックレス・ピアスなどのアクセサリーを積極的につくる理由を「気に入ったアクセサリーを使っているうちに、どんなプロセスでどんな人がつくったんだろうと興味を持つてもらえるかもしれないとの思いからです」と未来に繋げるための工夫も語ってくれました。

(写真左上)沈金の手法を使ったアクセサリーはファンも多い

(写真左下)彫刻刀で繊細な模様を彫っていく

(写真右下)八尾さんの作品「沈金盃しのぶ」



Profile

京都造形芸術大学(現京都芸術大学)芸術学部歴史遺産学科で「硯箱」を研究したことをきっかけに漆芸に興味を持ち、石川県立輪島漆芸技術研修所へ入所。その後、奈良伝統工芸後継者育成事業第4期生として3年間研修を修了。グループ展などで作品を発表している。



592

710

794

11

STORY 2

なら工芸の都、

1300年の歴史と今

飛

鳥

時

代

奈

良

時

代

平

安

時

代

NARA CRAFTS MUSEUM STORY BOOK

歴史年表と 奈良工芸

奈良に関連するできごとを中心
にした歴史年表に沿って、奈良
の工芸の移り変わりがジャンル
ごとに一覧できるようにまとめ
ました。



シルクロードから伝わった美の主役

奈良時代・聖武天皇の時代には、遣唐使や外国からの使節らによりシルクロードを経て我が国に持ち込まれた文物が当時の美の主役となりました。今もそれを具体的に伝えてくれるのが正倉院宝物の数々です。

木画・螺鈿・染織などの名品は、現代の奈良工芸の原点ともなっていきました。また、当時の祈りのかたちを行事として今に伝えるのが、東大寺大仏開眼の年に始められ、1270年もの長い間一度も途絶えたことのない東大寺二月堂修二会(お水取り)です。

正倉院宝物の鮮やかな色彩やエキゾチックなフォルム、またお水取りで仏様に供えられる椿の造花は、今なお繰り返し用いられている奈良工芸の代表的なモチーフとなっています。

正倉院
正倉



正倉とは重要な物品を納める倉のことと、平安時代ごろまでは全国の大寺などにいくつもありましたが、いつしか廃れ、現在では奈良東大寺にあったものだけとなりました。奈良時代・聖武天皇の七七忌の忌日に、光明皇后が遺愛の品を東大寺に奉納したものが、現代まで伝わる正倉院宝物の始まりとなりました。(現在、正倉院は宮内庁の管轄です)

平螺鈿背円鏡



正倉院宝物を代表する名品のひとつが写真の「平螺鈿背円鏡」です。鏡の背の部分に施された螺鈿は、現代の奈良漆器の代表的な技法のひとつになっています。このように、正倉院宝物の数々は、技法の面でも、文様や色使いといったデザインの面でも、奈良の工芸に大きな影響を与え続けています。

奈良は貴族の信仰の地へ

都が奈良から京へ移ると、奈良は南都と呼ばれるようになります。政治の中心ではなくなりましたが、東大寺や興福寺、春日大社などの大きな社寺への信仰は衰えず、定期的に天皇や貴族が参拝のために奈良を訪れるようになったのです。奈良時代にはすでに行われていたとされる社殿などを定期的に新調することを造替(遷宮)と呼びます。他の地域の主要な神社では断絶してしまうことも多かったのですが、春日大社では造替制度のおかげで現代にいたるまで途絶えることはありませんでした。さまざまな神宝や調度品も新調される造替は、奈良の漆、やきものなど工芸技術の継承にも大きな役割を果たしてきたと言えます。さまざまな工芸品が祭りを彩る「春日若宮おん祭」もまた、平安時代の1136年(保延2年)に閑白藤原忠通によって始められて以来、900年近くもの長い間続けられています。特に田楽花笠や盃台を飾る木彫りの人形は奈良人形(一刀彫)の始まりと考えられています。

春日大社



奈良時代の初めに茨城県鹿島より武甕槌命が鹿に乗って御蓋山に降り立ち、768年(神護景雲2年)、御蓋山の麓に本殿が造営されたことに始まる神社です。国家・国民の安泰を守る神として信仰され、平安時代以降も天皇や貴族などが頻繁に参拝に訪れました。1200年以上続く春日祭は、日本三大勅祭(天皇の代理の勅使が派遣される祭)のひとつです。

写真提供:春日大社

春日若宮おん祭



毎年12月15日～18日を中心に行われる春日若宮おん祭は、平安時代の1136年(保延2年)に、時の閑白の藤原忠通によって始められ、現在まで900年近くも続けられてきました。天災による飢饉や疫病を収めるためでした。神楽、田楽、舞楽などの芸能が次々と奉納される御旅所祭を中心に4日間行われます。

写真提供:春日大社

盃台



盃台とは、春日若宮おん祭で用いられる威儀物です。檜台に季節の花の絵を描き、台の上には松竹梅の造花と奈良人形(一刀彫)を飾ります。これが後に独立し、現在のような奈良人形(一刀彫)になったとされます。明治以降、盃台の制作は途絶えていましたが、1988年(昭和63年)に復興されました。

写真提供:春日大社

奈良の地で、わび茶が誕生

茶の湯は庭、さらに茶室・器などの工芸品、料理・花などをトータルで演出する「総合芸術文化」と呼ばれます。

現在の茶道のルーツは、室町時代中期の茶人・珠光が創始した「わび茶」に行きつきます。

奈良出身の珠光は称名寺で出家しました。彼の教えは、奈良きたまちに住み、茶会記「松屋会記」で知られる松屋歴代・千利休・戦国武将の織田信長らに受け入れられ、発展しながら今に至ります。

奈良は茶の湯の原点であることから、2014年(平成26年)から、奈良市内の社寺などを会場に主な流派が趣向を凝らした茶会を開く珠光茶会が続けられています。

称名寺



わび茶の祖とされる珠光は称名寺で得度し、獨蘆庵と呼ばれる茶室を建てました。毎年5月15日に行われる珠光忌で、本堂と茶室獨蘆庵、ゆかりの竹などが公開されます。境内東側にある千体地蔵尊は、多聞城の石垣を築くために周辺から集められた石仏で、多聞城が廃城になった後、ここに集められました。

多聞城跡



戦国武将・松永弾正久秀は、1559年(永禄2年)から翌年にかけ、東大寺や興福寺を見下ろす眉間寺山に多聞城を築きました。後の天守にあたる四階櫓などがあり、近世城郭のさきがけだったと考えられています。城内には二つの茶亭または茶室がありました。久秀が反旗を翻した織田信長の命で取り壊され、現在は、若草中学校が建っています。

珠光茶会



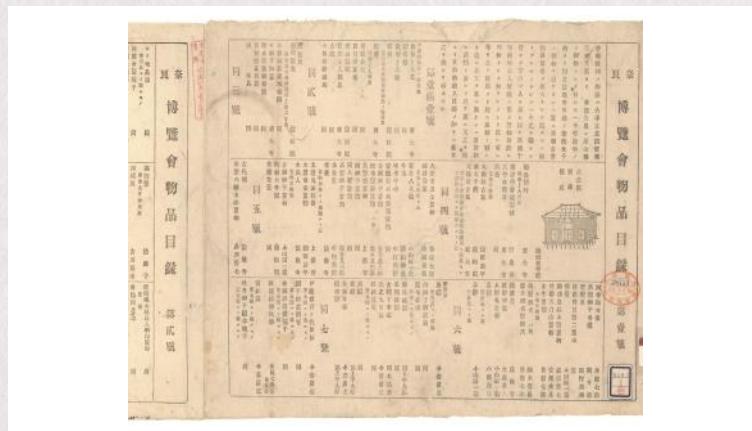
東大寺、春日大社など奈良市内の主な社寺などでの茶会を中心とした伝統文化イベントが珠光茶会です。2014年(平成26年)から毎年2月に開催されております。わび茶の創始者である珠光が奈良市内の称名寺の僧であったことから、企画されました。茶会だけにとどまらず、茶道や茶道具をテーマにした展示会や講演会なども行われます。

写真提供:珠光茶会実行委員会

奈良工芸史の転機となった奈良博覧会

武士の世が終わり、近代の幕が開いた明治時代。政府は、欧米諸国に追いつけ追い越せと殖産興業を進めていくようになります。明治初頭、大きな寺院がある奈良では、神仏分離令による「廢仏毀釈」の嵐に巻き込まれますが、都が京都へ遷った後は社寺を中心に町が形成され、奈良に根づいた社寺を重んじる土地柄もあり、少しずつ寺院は力を取り戻していきました。そして、社寺とともに在ったといつてよい奈良の伝統工芸も嵐を乗り越え、注目を浴びることになります。それが、1875年(明治8年)から1890年(明治23年)までの間に15回開催された奈良博覧会という一大イベントでした。国の主導で開催されたこの博覧会のメイン会場は東大寺大仏殿の回廊でした。正倉院宝物や各寺院のお宝が披露されただけでなく、当時の森川杜園(一刀彫)、吉田包春(漆芸)などの名工の手がけた工芸がスポットを浴び、今に至る奈良工芸の道をさらに拓く転機となったのです。

奈良博覧会図録



写真は、1875年(明治8年)4月から60日間開催された第一回奈良博覧会の図録です。明治時代、全国各地で開催された博覧会は、奈良でも15年間連続で行われました。特色は、産業育成だけでなく、正倉院や古社寺に伝わる古い器物を多く展示した点にありました。また、当時の名工たちに模写させることにも力が入れられ、正倉御物の復元模造の一級品の多くが生まれました。

写真提供:奈良県立図書情報館

森川杜園の作品



御生玉状白鹿座像(春日大社所蔵)

森川杜園[1820年(文政3年)～1894年(明治27年)]は奈良を代表する名工のひとりです。13歳ごろから絵画を学び、18歳で奈良人形一刀彫を習得しました。狂言師としても活躍し、伝統の技法を生かしながら、新機軸と打ち出した作品を次々と世に出しました。30代後半からは春日若宮大宿所前絵師職を得て、春日有職奈良人形師と名乗り活躍しました。「奈良人形一刀彫中興の祖」と称されています。

写真提供:春日大社

開館時間 10:00-18:00(入館は17:30まで)

休館日 毎週月曜日(その日が祝日の場合は開館)

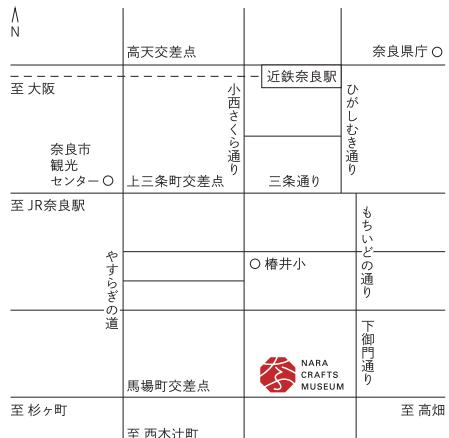
祝日の翌日(その日が土・日・祝日にあたるときを除く)

年末年始(12月26日～翌年1月5日)

その他、展示替えの期間等、臨時に休館することがあります。

交通の案内 近鉄奈良駅より徒歩10分 / JR奈良駅より徒歩18分

駐車場有り 4台(うち1台は身障者等用)



問い合わせ 〒630-8346

奈良県奈良市阿字万字町1番地の1

なら工藝館

TEL 0742-27-0033

FAX 0742-27-9922

URL <https://www.nara-kogeikan.city.nara.nara.jp/>



ご来館の方へ

1階事務局にて車椅子の貸し出しをしているほか、

優先駐車場をご用意しております。

館内にはエレベーター、バリアフリートイレ、授乳室があります。